

選んだ部分：p44 「されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。」から「己もそうしなければ、がしをする体なのだ」まで。

背景は、京都の南の門、羅生門であり、何年間飢饉が続いて、人々の暮らしが厳しくなっている情景です。この部分は、羅生門の上で、下人が老婆の話を聞いて、老婆の着物をはぎ取る場面である。

この場面は、会話が少ない物語の中、人物の台詞が多く書かれてあり、そのゆえ、人物の思考を知ることが出来、・物語の主題・テーマが最も直接に表明されている部分である。この部分で芥川は、下人の純粋さの表れ、生（せい）への「勇気」、そして老婆と下人の会話を通じ、この物語、「羅生門」の主題である、「正義」と「現実」は、密接な関係にあるという見解を明かしている。

一ニキビの象徴性

物語で、下人が自分の頬のニキビを気にしている描写が何箇所かある。ここ部分では、下人の心の動きの描写を通じ、そのニキビの意味とそれの持つ象徴が書かれている。

芥川は、次のように描写します：「右の手では、赤く頬に海を持った大きなニキビを気にしながら、（老婆の話を）聞いている。」ニキビというものは、若い時だけ現れる、つまり、未熟、純粋さの象徴。ニキビを気にしていることは、下人がまだ、人生の生き方、世の中を知らない、無知な存在であることの表しです。

下人は、前の場面で明かされた通り、主人を無くし、この後の生活に困窮している。この厳しい世の中をどうやって生きて行くか、迷っている、まだ幼い存在であるのです。下人がニキビを触っているということは、下人のこのような心の状態の表れです。

老婆の話の後、下人は「一步前へ出ると、不意に右の手をニキビから離して、老婆のえりがみを掴む」と描写されている。そして、ニキビから手を離した下人は、こういう：「では、俺がひはぎをしようとうらむまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」この台詞は、内的葛藤を抱えていた下人が、現実を直視し、悪いことをしなければ食っていけないことを理解したことを表す。ニキビから手を離し、純粋さを捨て、現実と向き合って決断をしたことを表す。

一善の勇気、悪の勇気

下人の決断には、純粋さからの脱皮だけではなく、勇気という感情、詳しくは、不道徳的な行動をとる、「悪の勇気」も必要であった、ことが表されている。

今までの物語は下人の行動だけに集中し、彼の振る舞いを描写するだけでしたが、この部分で、初めて下人の心情が直接、表される。芥川は、こう書する：「これを聞いているうちの、下人の

心には、ある勇気が生まれてきた。それは、さっきの門の下で、この男には欠けていた勇気である。そして、またさっきこの門の上へ登って、この老婆を捉えたときの勇気とは、全然、反対な方面に働こうとする勇気である。」

「老婆を捉えたときの勇気」とは、老婆の怪しげな行動を叱ろうとしたときの、正義感のある、「善の勇気」である。しかし、老婆の話聞いてから、下人の心には、老婆の服を盗むという、不道徳な行動を正当化し、これを行動に移すに必要な、「悪の勇気」が現れる。この二つの「勇気」を比較することで、芥川は、「勇気」の両面性を表現し、善と悪、両方が、勇気のいる行動であることを述べている。

ー正義は何か

ニキビの象徴、そして「勇気」の両面性、この二つのモチーフを通じ、芥川は、善と悪につき、とある意見を述べています。下人は、老婆の服を盗んだ後、「おのれもそうしなければ、がしをする体なのだ。」と言います。下人のこの行動は、明らかな「悪」であります。しかし、老婆が言ったように、「せねば、がしをするから、仕方なくすることわいの。」と、心の中で正当化しています。

ーフィン

この通り、芥川は、この抜粋文での下人の行動や台詞を描写し、次のような見解を述べています：「厳しい現実を目の前にした人間には、善と悪の境界は崩れる」、そしてこの下人の悪に満ちた行動も、正当化される余地がある、と。